

梨と子供の時によく言つた僻地、勾配の急な草屋のなめらかしい煙の登る様、大古時代から子孫が連続と傳はつたのだらう。寫生しはじめた、灰色の鎮守の腐つた建物を中心にして、面白くないが遠景に農家と松の森繪具の不善なので、けばくして筆が延びない、午前十一時、草の靡いた形が出ない、木を切る音が聞える、仙化せられた人となつた、思はず一息に書き終つた。

日記の一節

鹿兒島 み い 坊

八月二十日午後より、永濱重範君と中名方面へ寫生に行た、僕はとある丘上に畫架を立て、漁村と林を前景にして櫻岳を寫して居たら、長い間後から見居た一人の農夫が「ソゲンシテサゲスム御取イヤットナ」と聞いた、何の事か僕にやさつぱり解らない、再三再四問ひ返したがわからぬ、僕はサゲスムと云ふのが解らんだ、僕は何も思はず、只さと答へたら「えー榮華いな」と云つて去つた、サゲスムと云ふのが氣になつて居たので、歸途に近所の爺やに聞いて見たら、何だ提げ寸と云ふ事で測量の事だつて、わかつておかしかつた、成程提げ寸と理ある事だわい。

八月二十九日、今日も又昨日の處へ出かけた、途中から「寫眞取がはら」と云つて。小供かわいわい云つて二三町ついて來た、

叱つても聞きやせぬ、夕刻約束の場所に出合つた永濱君の寫生中の奇問「そんなに書いて、歸つて寫眞に取つて賣るんぢやすか」と聞く者があつたつて、田舎ぢや寫眞が畫より餘程えらいんぢやなと大笑した。途中で僕等を氣ちがいが來たと云つたと云ふ噂を聞いた、開けぬ者つて滑稽なもんぢや。

九月一日、十號ひつ提げ竹藪に行いて書きかけたら、藪蚊の多い事にや閉口、足をはらへば脊中をやる、手は届かぬ、かゆさはかゆい、仕方がない、如何程熱中し居たとて之れにやたまらぬ、早々かへつた、夜中通してむしやくしてかゆくてかゆくて寝られなんだ。

九月二日、何程蚊が多いたつて、やりかけたのをやめる氣になれやしない、いろ／＼考へた末善い事を思ひついた、僕はきらいながら煙草を持つ事を、ほんとに善い法だ、其煙でか臭で知らぬが、時々やると蚊やなんぞそこらへ來もしない、大いに助かつた。小事だが僕にや大發明でもした様に嬉しかつた、そして非常に楽しく、今日はすごした、今夜はかゆかないが、明日の天氣とスケツチが氣になつてよう寝られない、夢でスケツチに行けば、夜も晝も書き通しぢやわい、明日も又好天氣を祈る。

予が退會の理由

昔の某會友

本誌八月號三六頁上段に

本誌は帳簿整理上如何に御懇意の方にてても前金に非ざれば發